

(論文) 在日コリアンのエスニシティ形成と表出

—集住地域の可能性と限界—

Formation and Expression of the Ethnicity of Korean Residents in Japan : Possibilities and Limitations of Concentrated Dwelling Areas

安本 博司

Hiroshi YASUMOTO

和歌山大学国際イニシアティブ基幹日本学教育研究センター

Abstract

The objective of this study is to reveal the relationship between concentrated dwelling areas of Zainichi (Korean residents in Japan) and the expression of their ethnicity, as well as the relationship between the formation and expression of ethnicity. A survey was conducted among seven male and female subjects living in concentrated dwelling areas in Osaka city and other areas of Osaka in the form of semi-structured interviews. As a result, three patterns of expression of ethnicity were identified: (1) a robust network based on family resources, (2) a robust network built up by individuals, and (3) a moderate network based on regionality. In pattern (1), an ethnic network is formed based on a family's social capital that is succeeded and preserved and ethnicity is expressed through the network. In pattern (2), ethnicity is expressed as a positive identity and is acquired through the process of forming an ethnic network triggered by close people, starting from a negative identity. In pattern (3), ethnicity is expressed to a limited extent on a moderate network formed in a school (ethnic class) of their own children and/or concentrated dwelling areas. Particularly in patterns (1) and (2), it was revealed that ethnicity is formed through experiences at ethnic schools and participation in ethnic associations and this has been a primary condition for the expression of ethnicity. It was also suggested that such expression can be inhibited or promoted depending on memories of experiences of being discriminated against and situations (e.g., social contexts including those inside or outside of Korean residents' community).

キーワード/Keywords エスニシティ、集住地域、エスニックネットワーク、ethnicity, concentrated dwelling areas, ethnic network

1. はじめに

総務省より地域における多文化共生推進プラン(2006)が出され、多文化共生の重要性が指摘されてきた日本社会において、異なる文化的背景をもつ者同士が互いのエスニシティを大切にし、自他のエスニシティに尊厳をもって生きていくことは、多文化共生社会を目指すうえで極めて重要である。しかしながら、これまで特定の民族集団への憎悪を表すヘイトスピーチが在日コリアン¹集住地域(以下「在日集住地域」と称す)内でも公然とおこなわれ、その被害実態が明らかになっている(国際人権 NGO ヒューマンライツ・ナウ, 2014)。そのような状況下でも、自らのエスニシティを意識的に表出させている者もいる。それは、在日コリアンに向けられた差別言動や否定的眼差しからだけでは、表出の要因を明らかにすることの限界を示している。筆者の問題関心は、生野区²という在日集住地域において、民族性を表出している者と、そうでない者とを分け隔てる要因であり、それを明らかにしたいというのが、本研究の動機にもなっている。生野区という在日集住地域において、エスニシティを表出している者と、そうでない者との間には、どのような違いがあるのだろうか。

本研究が着目する大阪市生野区(在日集住地域)は、他の地域とは異なる特性がある。生野区内にはコリアタウンがあり、民族学校(朝鮮学校³)があり、在日の NGO/NPO など、数多くの団体が存在している。フィッシャー(Fischer, 1975 広田訳 2012)の言葉を借りれば、制度的完備⁴[例:大阪市内には6つの朝鮮学校(生野区内に1校)、2つの韓国学校⁵が設置]がされている。そのような地域性に着目する理由は、先行研究(西田, 2002)において集住地域という特性が在日のエスニシティの顕在化/潜在化に関連していることが示されたからである。しかしながら、そこには、家族のもつネットワーク、教育観、あるいは家庭外での「日本人」「同胞」との接触などから形成されるエスニシティも関係してくるように思われる。自らのエスニシティの表出に関わる問題は、「かつて」の問題ではなく、「いま」に続く今日的課題でもある。以上のことを考えたとき、「いま」に生きる在日のエスニシティ表出の要因を、地域性だけではなく、家庭のもつネットワーク、家庭内外でのエスニシティの継承・獲得にも着目し、分析することが必要ではないだろうか。

2. 先行研究

この章では、フィッシャー(Claude S. Fischer)の「下位文化理論」を取りあげ、その理論を援用した西田(2002)と、独自の計量的調査を実施した福岡・金(1997)の研究にふれておく。まず、前者が参照した「下位文化理論」は、主に4つの基本命題で構成されている(Fischer, 1975 広田訳 2012)。そのうち、本稿と関わりが強いと思われる命題2、3をみていく。命題2は、場所が都市的になればなるほど、下位文化の強度は増大するというものである。具体的には、都市の「臨界量」に着目し、人口が増大することによって、制度的完備がされ社会的紐帯が維持、促進されるというものである。また、

集団関係においては、下位文化同士の対照と紛争が増大し、下位文化の強度が増大するという(=内集団の凝集力を強める)。命題3は、場所が都市的になればなるほど、普及の源泉の数が増大し下位文化への普及が増大するというものである。普及とは、下位文化成員が別の下位文化成員の行動や信念を採用することであると定義している。

西田の研究(2002)では、フィッシャーの理論を援用し、大阪都市圏に住む4家族57人の在日韓国・朝鮮人の生活史インタビューで得られた語りをもとに、エスニシティの顕在と潜在の条件を探っている。そこで明らかになったことは、学校における民族差別はエスニシティを潜在化させること、地域社会におけるエスニシティの顕在と潜在という観点からは、地域における同胞数、日本人との混在の度合いなどによって、生活に民族的な様相が表出されるか否かに違いが生じているということである。一方、在日集住地域以外では、日本人社会における潜在化圧力を受け、民族性の表出が抑制された事例を示している。在日集住地域において西田(2002, p. 523)は「集住地効果」(民族を同じくする人々が特定の地域に多数居住することで民族性の表出が可能となり、同時に日本人との間にも比較的良好な関係が結ばれること)があるとし、どのようなメカニズムで生じるのかを「下位文化理論」を手がかりに検討している。具体的には、「臨界量」を超える人口集中と下位文化間の「接触」の2つから検討している。前者の「臨界量」については、在日集住地域ではエスニックネットワークが形成され、エスニック機関の一つとして民族学校が建設、維持され、民族学級⁶・民族教育(民族意識の形成)の促進に繋がっているという。後者の下位文化間の「接触」については、緊張関係、文化的衝突によって、下位文化は強化されることを、日本人による民族差別を経験した者が「日本人に負けるな」と敵対感情を強くもったり、子どもを民族学校に通わせる選択をしたりすることを例として挙げている。また、下位文化間の「接触」は、対立をもたらすだけでなく、相手の文化の要素を取り込み、伝播と修正が生じ、さらには民族的な境界を越えた関係が形成され、メンバーから脱退する者もいるとし、日本社会への同化などがそれにあたるとしている。

一方、福岡・金(1997)の「1993年在日韓国人青年意識調査」では、18歳～30歳の者を対象に量的調査を実施している。その中でも、本研究と関連の強いと思われる「エスニシティ形成」に関する調査では、在日韓国人を代表するエスニシティの指標として11の指標が示されている。その内の「民族関連書籍の参照度」「民族関連知識の獲得度」「母国語力(読解)」「母国語力(会話)」「本名使用度」「祖国統一問題への関心度」の6つの背後の共通因子として「民族的な問題を意識し、それを解決していこうとする主体的な志向性」のようなものがあるとし、「主体志向的エスニシティ」と名付けられた。また、11指標の内の「チェサ⁷を継承する意志」「同胞の友人との交友願望」「同胞との結婚志向」「同胞社会への愛着度」「国籍を保持する意志」の5つの背後にある共通因子として、「情緒的に民族的なものとの紐帯を求めようとする関係的な志向性」のようなものがあるとし、「関係志向的エスニシティ」と名付けられた。そして、この2つの

志向の形成要因は大きく異なるという。関係志向の形成には、「成育家庭内の民族的伝統性」(家庭内での民族的土壌にふれる程度)、「民族団体への参加経験」によって左右されるが、主体志向の形成には、「受けた民族教育の程度」「民族団体への参加経験」によるところが大きいとされている。加えて、本研究で着目する集住地域との関連で言えば、成育地域内同胞数はゼロ次の相関レベルでは、両志向ともに高い関連は見られたが、エスニシティ形成においては、直接およぼ影響ではなく他の要因を通じた見かけ上の関連にすぎないという。

西田の研究は、「地域性」(人口の臨界量)に着目していることから、本稿が着目する「生野区」という地域の特性(在日集住地域)での在日同士や日本人との「接触」において参考にできる。特に、フィッシャーが提示した命題2、3を検証し、「地域性」(臨界量と接触)からエスニシティの顕在化/潜在化を論じた点は重要である。しかしながら西田の研究では、家庭内での継承が顕在化に影響を与えていることは言及されているものの、論考そのものを見ると、地域性(在日集住地域)がエスニシティの顕在化の主要な条件として捉えられてしまう恐れがある。一方、福岡・金の研究は、集住地域に住むことでエスニシティ表出が可能になることよりも、むしろエスニシティ形成がエスニシティ表出の主要な条件であることを示していると言える。本稿では、両者の知見を生かしながら、地域性が果たしてエスニシティ表出の主要な条件となり得るのかを検討したい。また、在日集住地域(非集住地域も含め)での接触、経験、その後の意味づけの変容を含め分析していく。

3. 調査概要

本稿では、2020年10月～2021年8月にかけて、在日コリアン7名に対しておこなったインタビューデータを分析した。調査では、家庭(教育戦略や文化保持、親のエスニックネットワーク)、学校(交際関係、被差別体験)、地域(エスニック団体との関わり)での経験を中心に聞き取りをおこなった。協力者は、コリア系NGO団体や知り合いを通して紹介してもらった。インタビュー時間は、一人につき1～2時間程度であるが、調査終了後に再度聞き取りをおこなったケースやアンケートに回答してもらったケースもある。調査趣旨の説明、協力依頼は、口頭及び文書によって示し、同意を得ている。なお、「4.」の考察の見出しは、筆者がエスニシティの表出に関連がある重要な用語として、語りから導き出したもの(=解釈的コーディング)である。

表1 研究協力者について

| 名前 (世代) | 性別 | 年齢 | (国)籍 | 家族構成 (国)籍 | 居住地 | エスニック ネットワーク | 表出 (±) |
|------------|----|----|------|--------------|------|-----------------|-----------|
| A (3世) | 男 | 37 | 韓国 | 妻(日) 子なし | 東大阪市 | 強 | 表出 (+) |

| | | | | | | | |
|------------|---|----|----|-------------------|--------------------|---|-----------|
| B (3世) | 男 | 38 | 朝鮮 | 妻(朝) 子3人(朝) | 東大阪市 →大阪市生野区 | 強 | 表出 (+) |
| C (ダブル) | 女 | 39 | 日本 | 夫(日) 子1人(日) | 寝屋川市 | 強 | 表出 (±) |
| D (3世) | 男 | 37 | 日本 | 妻(日) 子1人(日) | 交野市 | 強 | 表出 (+) |
| E (3世) | 女 | 39 | 日本 | 夫(日) 子2人(日) | 大阪市生野区 | 中 | 表出 (±) |
| F (2世) | 女 | 39 | 韓国 | 夫(韓) 子2人(韓) | 大阪市生野区 | 中 | 表出 (+) |
| G (3世) | 女 | 38 | 韓国 | 夫(韓→日) 子2人(二重) | 大阪市天王寺区 →大阪市生野区 | 弱 | 表出 (-) |

* エスニックネットワーク強：韓国朝鮮系民族団体に深く関与し、活動している者。
 エスニックネットワーク中：韓国朝鮮系民族団体に深く関与していないが、交流が普段からある者。
 エスニックネットワーク弱：在日コリアンとの接触がほとんどない者。
 * 表出(+)：エスニシティが他者から把握され、自身のルーツを表出している者。
 表出(±)：エスニシティが他者から把握されないが、関係性や限定されたコミュニティ内で表出している者。
 表出(-)：日常生活全般において、エスニシティを強固に隠している者。

表2 研究協力者の両親について

| 名前(世代) | 年齢 | (国)籍 | 民族学校経験 | 民族団体活動経験 |
|-----------|-----|-------|----------|----------|
| A1【父】(2世) | 60代 | 韓国 | なし | あり |
| A2【母】(3世) | 60代 | 韓国 | なし | あり |
| B1【父】(2世) | 60代 | 朝鮮 | あり(朝鮮学校) | あり |
| B2【母】(2世) | — | 朝鮮 | あり(朝鮮学校) | あり |
| C1【父】 非該当 | 70代 | 日本 | 非該当 | 非該当 |
| C2【母】(2世) | 70代 | 韓国 | あり(朝鮮学校) | なし |
| D1【父】 — | — | 韓国 | — | — |
| D2【母】(2世) | 60代 | 韓国→日本 | なし | なし |
| E1【父】(2世) | 70代 | 韓国 | あり(韓国学校) | なし |
| E2【母】(2世) | 70代 | 韓国 | なし | なし |
| F1【父】(1世) | — | 韓国 | なし | あり |
| F2【母】(1世) | 60代 | 韓国 | なし | なし |
| G1【父】(2世) | 70代 | 韓国 | なし | なし |

| | | | | |
|-----------|-----|----|----|----|
| G2【母】(2世) | 60代 | 韓国 | なし | なし |
|-----------|-----|----|----|----|

*A1、2：民族団体活動経験は、在日韓国民民主統一連合と、その後の在日本韓国青年同盟。A1(2世)、A2(3世)であるが、Aは自らを3世と称している。

*B1(朝鮮大学校出身)：在日本朝鮮人総聯合会が設置した朝鮮学校教員。

B2(朝鮮初中高級学校出身)：在日本朝鮮人総聯合会傘下の在日本朝鮮民主女性同盟で活動。

*D1：幼少期に離婚しているため詳細は不明。

*F1：在日本大韓民国民団に属していたが、74歳のときに他界したため活動の詳細は不明。

*「――」は、不明。

4. 結果と考察

4.1 家庭の資源を土台に形成された強固な在日ネットワーク⁸

対象者のA、Bは同胞との強固なネットワークを有している。これは、家庭内での親の教育観、ネットワークを土台に方向づけられたものとして捉えられる。Aは幼少期から親の影響を受けて、在日のコミュニティにコミットし、ネットワークを形成している。Aの語りを見てみよう。

*(インタビュアー)：その(在日本大韓民国)青年会⁹に入るきっかけって何ですか。

A：俺、東大阪出身なんですけど、地域のお祭りという、(東大阪)国際交流フェスティバルってというのがあって、(中略)そのときは親も関わってるからっていうので出店だしてたんです。そのときに青年会が出店してて、当時の東大阪の会長が僕の中学校(韓国学校)の同級生だったんですよ。〇〇の同級生やって、「おお」ってなって。(中略)誘ってくれたっていうのもプラスで、ちょっとやってみようかなってなって。もともと小学校のときは、親の教育方針で韓青(ハンチョン)行ってたんですね。小中の5年間。

Aの母は、Aを韓国学校(小中)に通わせ、在日韓国青年同盟¹⁰(韓青：ハンチョン、以下「韓青」と称す)という民族団体にも幼少期から関わらせている。加えて、母親の活動の影響から幼少期に地域イベント(東大阪国際交流フェスティバル)に参加し、上記の語りの文脈で「九条マダンとかの手伝いに行って、(中略)家訪問とかやりましたよ、普通に」と、在日集住地域(京都市東九条)のお祭りなどにも参加している。Aは、民族学校選択に関する筆者の問い「それは親の教育方針だったんですか」に対して「もう当然のようになって感じですね、1時間かけて行ってきました」と答えている。Aにとって、民族学校でのネットワークが地域イベントでの出会いにも繋がり、在日本大韓民国青年会(以下「青年会」と称す)への回路が開かれている。そこには、上記の語り「ち

よっとやってみようかなってなって。もともと小学校のときは、親の教育方針で韓青(ハンチョン)行ってたんですね」にあるように、幼少期からの韓青との関わりが土台になり、青年会への参加が意味づけられている。他方、地域との関連で言えば、在日集住地域で生まれ育ったわけではないが、親の教育方針(韓青への関わり)から在日集住地域内で活動している。以下の語りは、幼少期の韓青についての回想である。

*：でも、行くときは子ども一人、自分一人で行くんやろ、そこに。

A：そうです、そうです。だから、毎週の韓国語講座とか、3回に1回は歴史をやるみたいなの。毎週、僕は生野の東支部に行ってたんですけど。行きましたよ。

*：楽しかったですか、やっぱ。

A：楽しかったですね。(中略)何かそういう民族意識とか、そういう何かこういう活動とか、そういうことの必要性はやっぱり、そんときに培ったんやと思います。

以上の語りを見ると、まず親や親族のネットワークを土台に社会関係資本が継承され、構築されている。その背景には、「両方(両親)とも韓青(ハンチョン)活動で出会って結婚した同士」と語られているように、その頃に形成されたネットワークがあり、それが維持・継承されていたからだと言える。両親とも日本の学校に通ってはいたが、民族団体の活動に参加しエスニシティを形成してきたと推察できる。実際に両親とも、本名を名乗り、韓国籍も維持しエスニシティを表出している。そして、子ども(A)に韓国人らしく生きてほしいという期待から、学校(韓国学校)選択、在日コミュニティ(韓青)への関与を強めたと考えられる。加えて親族で言えば、「サンチュン(おじ)が〇〇で、去年、一昨年までかな、〇〇(肩書名)、本部でずっとやってて、今、〇〇(肩書名)(中略)結構そういう繋がりもあって」というように、親族もまた民族団体の中心メンバーでもある。そのような環境、土台があって、自らも民族学校や青年会へ参加することによって民族的アイデンティティが獲得されてきたことが推察できる。さらに、そこで培われたネットワークによって、在日集住地域(生野)への回路が開かれ、そこでの活動が、一層自身のエスニシティの表出に繋がっていると言える。

一方、Bも、父や弟が朝鮮学校の教員であること、妹も民族団体に深くコミットしていることから自身のルーツを十分に感じる環境にあり、在日朝鮮人中心のネットワークを有していたと言える。そして、自らも在日コミュニティへの関与を強めていった。Bの語りを見てみよう。

B：僕は親(父)が(新潟の)朝鮮学校の教員をずっとしていたんですが、(中略)小学校に上がる時に父親の地元が大阪ということで、大阪に転勤になりまして、小学校1年からは東大阪市に住んで、中学校2年上がる時に(生野に転居)。(中略)そっからずっと生野です。

B:(妹は)愛知県の総聯(在日本朝鮮人総聯合会)の(在日本朝鮮民主)女性同盟の活動
やってまして、弟は大阪朝鮮高校の教員やってます。僕と家族は特殊すぎると思う
んですけどね。

Bの父は、朝鮮学校の教員で、仕事の関係で大阪へ移住し、生野区に居住するようになった。また、Bは、妹、弟について話す文脈で「僕と家族は特殊すぎると思うんですけどね」と述べ、他にも「バリバリです」という表現を用いて、一家の特殊性(他の在日家庭と比べて在日朝鮮人コミュニティにどっぷり浸かっている)を言い表している。B自身もそこから外れることなく、現在も在日朝鮮人のコミュニティ中心に生きている。その背景には家庭や学校、民族団体との関わりが大きい。以下は、民族団体との関わりでの語りである。

* : 民族団体との関わりというのは、大学卒業して？

B : さっき言った(在日本朝鮮)青年同盟。生野、僕の住んでいるところの近くにも支部があるんですが、高校2年生の時に、その支部の先輩が突然家に来まして。夏になると、学生会(日校在学朝鮮人学生会¹¹)が、日本学校に通っている、(朝鮮半島に)ルーツをもっている人たちとキャンプイベントするんですよ。そのサマースクールを誘いに行く活動、一緒にやれへん？と突然誘われまして。

Bは高校生のか、在日本朝鮮青年同盟¹²(朝青：チョチョン、以下「朝青」と称す)の活動に参加していく。生野区には、在日の運営する団体が数多く存在し、制度的完備がされているがゆえに、他のエスニック団体に属す成員からの誘いを受けやすい環境にある。Bは小学校から高校まで朝鮮学校に通学し、大学も東京にある朝鮮大学校に通いながら朝青の活動に関わっていた。A、Bの共通点は、そこで自らのアイデンティティ(Aは在日韓国人として、Bは朝鮮人としてのアイデンティティ)を獲得し、自らのエスニシティを本名使用という形で体現し続け、日本国籍を取得することなく韓国籍もしくは朝鮮籍を維持していることである。

しかしながら、Aが自身のことを在日韓国人であるとアイデンティファイしているのとは対照的に、Bは「朝鮮人」としてアイデンティファイしており、自らのことを「在日朝鮮人」とは言わない。そこには、B自身が将来的には朝鮮での生活を思い浮かべていることからわかる。「在日志向」か「祖国志向」かの違いからも、異なるアイデンティティを有していると推察できる。

Bは、自身のアイデンティティに関して、筆者の問い「朝鮮学校通うことで、自分にとって良かった点ってありますか？」にも「自分のルーツ、歴史、ですね。民族の言葉、文化、歴史。なぜ僕たちはここに住むことになったのかを知って、アイデンティティはやっぱり、確立できたということが一番大きいかなと思います」と語り、朝鮮学校での

経験が自身のアイデンティティ獲得に繋がったと認識している。その民族学校選択は、どこまで親に方向づけられたのかは明確にはわからないが「自分がちょっと行きたくて。大学になったら特に、自分が行きたくなって行ったというのがあって。高校、大学ですよね」と語り、中学校までは親の方針で、高校、大学からは自らの意思で、朝鮮学校を選択した様子がうかがえる。そのような朝鮮人としてのアイデンティティをもつ B だが、一時期バイト先の店長に、〇〇(本名)はまずいからと、通名で呼ばれていた。そのことに B は「嫌ではありましたかね。まあ、なんかしょうがないかと終わりましたけどね」と語っている。これは自ら抑制したわけではなく、マジョリティ側の都合で抑制されたケースである。しかしながら、そのことが大きな葛藤に繋がったことはなく、「しょうがない」という言葉は、おそらく日本社会の現実を再確認した程度であろう。以上のような経験を経ながらも、親の教育戦略、地域性(同胞からの誘い)を土台に、B 自身も同胞とのネットワークを構築していったと推察できる。

4.2 自ら形成した強固な在日ネットワーク¹³

次に、自らを在日ネットワークを形成、在日コミュニティを中心に活動している C、在日ネットワークを有する D に焦点を当てる。この二人は、A、B に比べると、親が在日コミュニティに深く関与し、強固なネットワークを有しているとは言えず、また幼少期から意識的、積極的に在日コミュニティにコミットさせる様子はいかぬ。むしろ、C に関してはその逆であり、以下の語りにもあるように、母は C が在日のコミュニティに関わることに反対していた。

C : うちのオモニがどちらかというと反対していて、劇団活動(在日に関する社会問題などを劇化)しているのもよく思ってなくて、あんたは日本人として育ててきたのに、みたいな感じで言われたこともあるので。

* : じゃあもう小中高と日本の学校ですか。

C : (そうです)でもなんか親戚の朝校の運動会には、家族みんな総出で行ったりしてました。反対してるのに、そういうことには参加させてましたね。

C は、民族学校経験はなく、母親は日本人として育てたかったという思いを抱き、配偶者選択に関しても「(親は私に)日本人と結婚してほしかったと思います」と語っている。その理由として、母が兄(Cにとっての伯父)に無理やり朝鮮学校(高校)に入れられたことを挙げ、それが母の配偶者選択(日本人夫の選択)に影響したのではないかと想像している。C は、親の意向に沿ってではないが、たまたま劇団の活動で出会った日本人と結婚し、親の意思に反して在日コミュニティに深くコミットしている。親の意思とは別に、前述の語りにもあるように、親、親族がもつネットワークは、C にエスニシティを十分に体感させる環境にあった。それは、朝鮮学校の運動会への応援だけ

でなく、次のチェサでの語りからもわかる。Cの父は日本人ではあるが、筆者の問い「アボジが日本人で、オモニが在日というのは、家の中ってというのは、どんな感じですか？」に対して、「親戚がバリバリなので、チェサを年に4回5回やったりするので、自分も小さい時から認識がありますし」と語っている。Cは幼少期から、祖国の文化を十分に体感できる環境にあった。それらのことは、志水・清水編(2001, pp. 166-167)、志水他編(2013, p. 15)が定義した「各社会集団の再生産戦略の一環をなすもので、意図的のみならず無意識的な態度や行動をも含む幅広い概念」の教育戦略として捉えることができるだろう。つまり、意識する部分(日本人として育てること)と意識しない部分(エスニシティの再生産)の両者が、子どものアイデンティティ形成に影響を与えている可能性がある。実際にCは、親の意思に反して、在日コミュニティへアクセスし、劇などの活動を通してエスニシティを表出している。在日コミュニティへのアクセスは、幼少期からエスニシティを十分に体感できる環境があったことや、以下の語りにもあるように親族ネットワークを通して方向づけられたとも言える。

* : 学生会で活動したりするのはお母さんとか嫌がったんじゃないですか？

C : めっちゃ嫌がりました。

* : そのきっかけって何だったんですか、学生会に入る？

C : サマースクールっていうのがあるんですけど、(中略)それを誘いに来たのも親戚のお兄さんなんですよ。(中略)高校1年の時に参加をして、そのとき初めて朝鮮の友だちができて。(中略)その時に、今度のサマースクールで演劇をするから、出えへん？みたいな感じで誘われて。そこから演劇に出て、色々教わるし、友達関係も濃くなって。

母親の意思に反して、Cは学生会(日校在学朝鮮人学生会)での活動をきっかけに、在日ネットワークを形成していく。これは、地域性(非集住地域)において、「地域(内での同胞)との関わりはなかった」とのCの語りがある一方、「親戚だけ。親戚が濃かった」と、近隣に住む親族はエスニシティを表出している様子が見える。その親戚を通して、サマースクールに参加したCは、学生会で活動するなかで、生野区内でおこなわれる在日のイベントにも参加するようになり、現在の活動の中心である劇にも繋がっている。CがA、Bと異なる点は、Cは在日のコミュニティ内では本名、それ以外では日本名を名乗っていることである。その背景には、幼少期の回想で語った「小学校の頃から、仲のいい友達には自分がハーフってことは言ってたんですよ。半分韓国やねん」「たぶん自分を守るためというか、無意識的にいじめられないようにするよう」と、西田(2002)が指摘した、日本人社会における潜在化圧力を感じ取った点があったからであろう。しかしながらCは、同胞(学生会の指導員)との出会いを通して、自らをハーフではなくダブルとして「すごいポジティブに考えられるようになって。(中略)人

生が明るくなったし、活動もより積極的にするようになりました」と、肯定的に意味づけられるようになったと回想している。母親の意向とは別に、Cには幼少期からエスニシティを体感できる場があり、親族ネットワークから朝鮮学校を身近に感じる環境があった。また、民族団体(学生会、朝青)や、主に歴史・社会問題を扱う劇の活動を通して、言葉を学び、歴史を学びながら、主体的に自らのエスニシティを形成してきたと考えられる。

一方Dは、Cと同じく在日集住地域の出身者ではない。また母親が国籍を韓国から日本に変更するとき、Dも日本国籍に変えている。しかしながら、親戚に朝鮮学校出身者がいたり、小学校のときから〇〇市在日外国人教育推進協議会に属す教員から民族活動に誘われ参加したりすることで、民族を感じる環境にあった。ただし、在日であること、民族活動に関しては、「あまり肯定的でないというか、高校ぐらいまでは、どちらかというめんどくさくなって、行かなかったりとか、名前(本名)を少し嫌がって(中略)自分のアイデンティティを肯定的に受け止めてなかったタイプ」と振り返っている。また、母親も「行きたければ行ったらいいという感覚ですね」と語り、同胞と関わることに對して積極的でない様子が見える。しかしながらDは、在日の友人や担任からの粘り強い誘いから、中学時代は休まず参加していたという。Dが本格的に様々な在日とのネットワークを構築していくのは、教員として職に就き、仕事上(〇〇在日外国人教育研究協議会での職務)の上で必要なこと、またそこでの仕事が自身の使命(コリア系日本人教員として先鞭をつける)を果たすうえで、重要視されていることにもよるだろう。その使命とは、筆者が将来展望を尋ねた文脈で語られている。

D：管理職になれない、行政職になれないとか、国籍が違うだけで、なれない、日本生まれであってもなれない(中略)日本国籍をもつ在日が増えていっているのであれば、私が入って、どんどん入って行って、中から訴えるような存在になってもいいかなと。

Dがそのような使命感をもつに至ったのは、在日であることを否定的に捉えることによって引き起こされた葛藤に起因している。また、それは自身だけの問題ではなく、一個人を超えた在日の問題として認識されている。それは、韓国留学の理由について尋ねた文脈で以下のように語られている。

D：ずっと思っていたんですけど、友人が社会の壁にぶつかる。自分がどこから来た誰かと、名前なんと、肯定的に受け止められないとか。(中略)自分は日本側やと(日本人として)、お付き合いしている部分はあったんですけど、結局どこに行ってもついて回るんですよ、朝鮮のことは。どうにかしたいと思っていたんでしょうね。

Dは、自身の問題を他者に投影するなかで、様々な問題について何とかしたいという思いから留学を決断した。この留学を通してDは、問題(自身を否定的に捉えること)に対して、「それは一定解決して(中略)文化もどっぷり1年間浸かって、帰ってきたときに、自信もって生きていける」と、心境の変化を表しており、留学が人生の転機になったと言える。その自信とは、在日として生きていくことの自信である。当初Dは、留学によって同化が体感できると思ったが、行ってすぐそれが打ち砕かれたと語り、「向こう行っても、在日やし、こっちにいても在日やし、自分自身がどう捉えているのか、行ったら(行って帰ってきたら)揺れなくなりましたね」と語っている。実際にDは現在、仕事においても、プライベートでも日本名、本名の両方を使用し、自身のルーツを表出している。

4.3 地域性を土台に形成された緩やかな在日ネットワーク¹⁴

前述のA、B、C、Dと比べ、E、F、Gは、民族系団体内での活動や仕事において強固な在日ネットワークを築いてきたわけではない。E、Fに関しては、子どもを通して学校や地域と関わり、在日ネットワークを形成している。一方Gは、一時期コリア系のNGO団体内でエスニシティを表出していたが、その後は徹底的にエスニシティを隠している。

Eは、親(父)が民族学校(韓国学校の小・中・高)出身者ではあるが、積極的に民族学校や民族団体への関わりを勧められたことはなく、地域で開催される、民族を感じるようなイベントにも参加したこともない。「親が(在日コミュニティへの参加に)積極的でなかった」という語りからも、親を通して在日コミュニティと関わる機会が少なかったことが推察できる。幼少期においては、小学校のときに民族学級に通ったものの、「楽しくなかった」と語り、自身の出自に関しても、「私、基本的に自分韓国人って嫌やったんですね。生野も早く出たかった人間なんで」と否定的に捉えていた。それは、父親の被差別体験を聞いたり、自身もまた「高校行ったときに(中略)私韓国人やねんみたいなこと言ったら、高校の先生にえらいねえと言われたんです。(中略)その時に差別される人間なんやっていうのは、高校入ってから、(生野を)出てからわかった感じですね」と語っている。Eは、生野区外で在日韓国人であることを表出することのしんどさを「高校行って、ちょっと言いにくいのがあって」と語り、また結婚後、関東に移り住んだ際にも、夫方の親から在日韓国人だとわからないように、「結婚式、チョゴリなんか、絶対着て来んといてねとか、私の親にも言って、友達にも言って。韓国色絶対出さんといて」と言われている。また、自身のエスニシティを徹底的に隠していたことから、日本社会からの潜在化圧力を受けていた。このような経験を経たEは、「生野っていいなって思って。(関東地域から)戻ってきて、(中略)いいなと改めてわかる」と、生野の良さを再認識している。離婚後、生野に戻り再婚したEは、子どもを産み育て、子どもが通う学校(民族学級)を通して、教員や他の保護者と繋がるなかで、在日韓国人であることの意味づけを変化させてきた。学生時代から在日韓国人であることを

否定的に捉えていたが、他の地域での経験が生野の良さ、「隠さなくてもいい」の再発見に繋がり、在日韓国人であることを「得してるなというのがありますね。どっちも知っているよみたいな」と肯定的に意味づけられるようになった。Eは、普段は通名を使用しているが、「生野の中では(在日韓国人であることを)全然言いにくいとか思ったことないですね」と語るように、自身のエスニシティを隠さずに生きていけている。そこには、民族学級に通う子どもを通して、他の保護者との出会いが「うれしくなりますよね。なんか仲間みたいなね」という思いや、そこで形成された新たなネットワークが背景にあると考えられる。

Fは、Eと同じ小学校出身(生野区)で、Eと同じく子どもは同じ小学校の民族学級に通っている。Fは普段、本名を使用し、また両親とも1世ということもあって、より韓国の文化を身近に体感できる環境にあった。本名使用は親の意向であったことから、自身のエスニシティは表出されていた。しかしながら、在日であることを否定的に捉えていた点においてはEと同じである。FはEと違い、民族学級での経験は「サムルノリ(民俗芸能である打楽器合奏)するのが、自分の中でも、今でも、色々思い出があって、楽しくって」と回想しているが、在日であることを否定する点において共通する語りがある。それは、周囲の状況や差別的な言動が背景にある。以下は高校時代を回想した語りである。

F：高3の時かな、テポドンが発射したときに、その高校の日本の友達に、あんたのせいや、『あんただけ一人飛行機乗って、国に帰ったらいいやろ。』朝一に言われたんですよ。(中略)それを言われたときに、自分がここで生まれ育つことはよくないことなのかなと思うこととか、〇〇ということは隠しながら生きていきたいとは、ずっと思ってたし。それがあから。

Fは、親の意向から本名を使用することでエスニシティは表出されていたものの、高校のときの経験が自身のエスニシティの表出を抑えることに繋がった。上記の語りは、曹(2013)の調査においても同様の語りが引用され、日本における朝鮮半島の語られ方がエスニック・アイデンティティの形成過程の際に心理的葛藤をもたらすと推察している。Fについても同様のことがうかがえ、この点がエスニシティの抑制に繋がったと言える。それは、本名使用によってエスニシティが表出されていることと、自らの意思で表出することとは、厳密に異なることを示唆している。Fは、その後も本名を使い続けている。それは、以下の語りにもあるように、以前のような後ろ向きのもではなく、在日であることを肯定的に捉えられるようになったことによるところが大きい。Fは高校卒業後、一時期生野区を離れ、就職するが、就職できた理由を以下のように語っている。

F：自分が高校卒業してから、すぐに営業事務に入ったんですけど、逆にそれが入れたというのが、自分が韓国人だから入れたというのがあって。(中略)韓国との取引が多くて、韓国と取引する人とかも、在日やということで、結構かわいがってくれたりとか。そういうことで、生野離れても、役立つこととか、目を向けられることってあんねんなんて思って、それから、中高よりかは、気にしなくなったけれど。

Fは、在日であるからこそ就職できたという思いと、生野区から出ても役に立てるという思いが、在日である自身の否定を和らげた。ある状況下において、在日であることを資本のように捉えられるか否かによっても、エスニシティの表出が左右される可能性があることを示している。E、Fに代表されるように、エスニシティは、人・社会状況によって抑制されたが、促進もまた、表裏一体の関係にある。それはFが、民族学級に通う子どもを通して出会った民族講師の影響から、「韓国人で良かったかなっていうのは思ったりとかもするけど、でも、政治がらみになったときに、ちょっとまた、嫌になってくるというのを繰り返しますね」という語りからも、エスニシティ表出の促進、抑制が、人や社会状況によって左右されることがわかる。

さらに、民族学級の保護者会に入ることで、Eと同じく、保護者間のネットワークが形成されている。李(2018, pp. 74-75)は、子どもを民族学級へ通わせる在日の保護者(母)へのインタビューから、民族性を隠している保護者が、子どもの民族学級への関わりによって、保護者同士のネットワークが形成され、そのことによって、在日であることを考え、変わる機会になっているという。E、Fどちらも、子どもを通して緩やかな在日ネットワークを形成し、在日であることを肯定的に意味づけている点において、民族学級での出会いが、自身の変わるきっかけ(意味づけの変化)になったと言えるだろう。

Gもまた、子ども二人を育てる在日3世である。幼少期からチェサに参加するなど、韓国朝鮮文化を体感できる環境にあった。しかしながら、家族を含め親族以外の在日ネットワークはほぼ皆無である。なおかつ、家族全員は韓国籍を維持しているものの、在日であることを徹底的に隠しており、G自身も日本人の友人などに在日であることを伝えたことがない。それは、E、Fが体験したような差別言動を身近に聞き、体験することで一層、エスニシティを抑制したからだと言える。その体験とは、「小学4年生のとき、あからさまに私に限らず、在日の生徒だけ担任が差別していた」「同じこととしても在日の子だけ別で怒られたりだとか」といった被差別体験である。Gは、生野区出身ではなく周辺区出身であるが、誰が同胞であるかなどを意識し、教員の言動から日本人教員が明らかに在日の子どもたちを差別していたという認識をもっている。また、弟が他県出身の日本人女性と結婚する際、相手方の母親に反対されたこともあり、在日であることを表明したとしてもプラスにならないという認識をもつ。

しかしながら G は、成人になってから一時期、韓国語を学ぶために在日の運営する

NGO 団体にアクセスし、韓国語を学んだり、イベントに参加したりもしていた。その活動の中では、本名を呼び名乗ることが原則であり、G 自身も受け入れている。G は当時を振り返り、「同じ境遇の中に、予めわかった上で皆と接し合っているから共感できる場所があって、楽やなというのがありました」と語っている。在日コミュニティへの参加が、G にとっては「居場所」になっていたことがうかがえる。ただし、社会運動や歴史に興味があつての参加ではなく、あくまで韓国語学習や交流目的の、安本(2014)において示された第3世代の「居場所」であつたと思われる。G にとって、安心して在日であることを表明できる場は、ここを除いて他になかつた。夫ともこの団体で出会い、現在は、結婚を機に生野区へ移り住み、子どもを育てている。E、F が子どもの民族学級を通してネットワークを形成していったのとは対照的に、G にはそのようなネットワークは存在しない。子どもが民族学級へ行くことにも「視野が狭まる」「民族学級に行ったら、がっつり在日やん」と反対し、生野区に対しても、「在日で生野やったら……」と、生野に住むこと自体否定的に捉えている。この背景には、G が語った母親の態度(生野区に住むことに対する否定的な言動)があり、また「民族学級や民族学校はだめ」という親の意向を受け入れたことにもよる。G が徹底的にエスニシティを隠すには、それを余儀なくされた学生時代の経験があつたからだと言える。そのような経験が、福岡(1993, pp. 96-98)で示された「帰化志向」のアイデンティティ形成に繋がつたともいへ、帰化することにもまったく抵抗がない。また結婚を機に、G の母親からも帰化することを促されている。

5. おわりに

本稿の分析で明らかになつた点は、エスニシティの表出は、単に「在日集住地域」だからといって促進されるものではないということである。もちろん、集住地域であるというのは重要なファクターではあるが、エスニシティの表出には、個別の前提の有無が大きく関与する。その前提とは、既に形成されていたネットワークの有無、親の教育観、民族的土壌にふれる程度、在日コミュニティへのコミットの程度であり、それらを土台にして形成されたエスニシティの影響が大きいと言える。さらには、それらの前提を土台に形成された新たなネットワークの有無、在日コミュニティへの関与の程度、日本社会での直接的/間接的な被差別経験などがエスニシティの表出に影響を与えていることが明らかになつた。

本稿の意義は、エスニシティの表出を、単に在日の「臨界量」に起因させるのではなく、家族のもつ社会関係資本を前提として(もしくは、前提としないで)、ネットワークの継承、維持、獲得をする中で、個々人がエスニシティを形成し、体現していることを示したことである。本稿では、西田(2002)、福岡・金(1997)のどちらの知見がエスニシティ表出との関連において妥当か試みる作業でもあつたが、前者の西田の研究との関連で言えば、日本人との接触以外にも、同胞との「接触」に着目することで、E、F に

見られるように集住地域であるがゆえの効果(同胞との接触がエスニシティの表出を促進すること)が確認できる。しかしながら、西田の知見は、集住地域が「表出」の主要な条件というより、接触機会が増すことによって得られる効果であり、表出の範囲が限定的であるという限界があるのではないだろうか。

一方、後者の福岡の研究「エスニシティ形成」との関連で言えば、A、B、C、Dの事例からは、家庭内での継承や主体的な行動によってエスニシティを獲得し、それがエスニシティ表出の主要な条件となっていることが明らかになった。Gは、間接的な被差別体験を有し、それがエスニシティ表出の抑制に繋がっている。しかしながら、自らコリア系 NGO 団体に接触し、同胞との交流を望んだことを考えれば、親のネットワークの有無にかかわらず、主体志向的にエスニシティを形成できる可能性がある。それは、E、F とて同じだろう。そのことを考えれば、集住地域外においてもエスニシティ形成が可能になり、エスニシティ表出の可能性を見出すことができる。本稿 7 名の対象者からだけでは、2つの先行研究で明らかになった知見の妥当性を判断することは難しいが、少なくともエスニシティ表出において、家庭内でのネットワークの維持や継承、主体的なエスニシティの獲得が大きな意味をもつことが示せたのではないだろうか。

最後に、残された課題も示したい。まず、非集住地域(散在地域)における在日のエスニシティ表出についての考察ができなかったことである。今後は、比較の観点から生野区周辺、大阪市周辺都市から離れた少数散在地域をも含め調査をする必要があると考える。また、民族学校がネットワーク形成やアイデンティティ形成にとって重要な「場」であることを鑑みれば、そこにアクセスできる家庭の経済的資源にも目を向けなければならない。それは、徳田・二階堂・魁生(2016, p. 153)が指摘するように、集住地域であっても経済的余裕がない場合、教育資源が用いられないままになるからである。それらの点については改めて考察したい。

付記 本稿は 2021 年 5 月 30 日移民政策学会発表原稿に加筆修正したものである。

謝辞 本研究は、日本学術振興会(JSPS)【20K13909】の助成を受けて実施した。本研究に協力してくれた、すべての方に感謝を申し上げたい。

注

¹ 朝鮮半島にルーツがある者たちの呼称には、「在日」「在日コリアン」「在日韓国人」「在日朝鮮人」「在日韓国・朝鮮人」「コリア系日本人」「植民地出身者とその子孫」など多岐にわたるが、本稿では文脈によって使い分け、便宜的にそれらを包括する言葉として「在日」もしくは「在日コリアン」を使用する。

² 2021 年 3 月時点で、大阪市生野区の人口は 126,930 人、内外国人登録者数は 27,460 人(韓国籍、朝鮮籍者数は 20,397 人)となっており、韓国・朝鮮籍者数が区人口の 15%程を占めている(大阪市 WEB サイト)。

https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/page/0000006893.html#03_03 (2022 年 2 月 7 日閲覧)

³ 朝鮮学校とは、在日本朝鮮人総聯合会が設立した学校であり、幼稚班・初級学校・

中級学校・高級学校・大学校があり、朝鮮語で民族教育をおこなう学校で、日本の法律では各種学校扱いとなっている。

- ⁴ 「(人口)規模が一定の臨界水準に達すると、社会的下位体系は、その下位文化を構造化し、包み込み、防衛し、育むような諸制度をつくりだし、それらを支えるようになる」という。また、エスニック集団に言及し、エスニック集団が大きければ大きいほど、エスニシティを強化する——教会、新聞、商店などに対する支持も大きくなり、人々を集団に結びつけ、部外者から保護し、つねにアイデンティティを意識させるという (Fischer, 1984 松本・前田訳 1996, p. 186)。
- ⁵ 韓国学校とは、韓国政府に認可された学校群を指し、大阪には一条校として学校法人白頭学院(建国幼・小・中・高)、学校法人金剛学園(小・中・高)がある。
- ⁶ 韓国・朝鮮にルーツをもつ子どもたちが、ウリマル(韓国・朝鮮語)・歴史・文化などを学ぶ場である。大阪市では、中国やフィリピンなどにルーツをもつ子ども向けの課外活動も増えていることから「国際クラブ」と総称している。
- ⁷ 儒教的祭祀儀礼で、「孝」に基づく祖先崇拜の儀礼を指す。
- ⁸ 強固な在日ネットワークとは、両親もしくはその一方が在日コリアンコミュニティを媒介としたネットワークを既に有しており、対象者がそれを土台に新たなネットワークを形成しているという意味である。
- ⁹ 在日本大韓民国青年会は、在日韓国人の生活者団体である『在日本大韓国民団(民団)』の傘下団体で、日本で生まれ育った18歳～35歳までの韓国にルーツをもつ青年を対象にした全国組織をいう。
- ¹⁰ 在日韓国青年同盟(略称：韓青【ハンチョン】)は、16～35歳の在日韓国人青年(朝鮮半島にルーツをもつ者、国籍は問わない)で構成される団体で、在日韓国人青年対象のウリマル(母国語)教室を中心に、地域に密着した活動を展開している。
- ¹¹ 日本の中学・高校に通う在日朝鮮人学生(日校生)による集まりで、日本各地にあり、朝鮮語や歴史学習、芸術文化体験、サマースクールなどの活動をおこなっている団体を指す。
- ¹² 朝鮮半島にルーツをもつ在日コリアンの学生や青年を対象にし、彼らの民族的権利や生活を守る活動を繰り広げる青年学生団体を指す。
- ¹³ 自ら形成した強固な在日ネットワークとは、家庭内(親)の在日ネットワークは限定的ではあるが、親族や周囲の働きかけが契機となって、同胞との強固なネットワークを形成してきたという意味である。
- ¹⁴ 緩やかなネットワークとは、家庭内(親)の在日ネットワークは限定的もしくは皆無であるが、地域性を土台に、在日コリアンの保護者と繋がったり、在日コリアンのNGO団体に参加したりと、同胞との何らかのネットワークを有しているという意味である。

参考文献

- 曹慶鎬(2013)「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様性に関する調査研究—日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に—」『多言語多文化：実践と研究 (Journal of Multilingual Multicultural Studies and Practices)』5, 100-120.
- Fischer, Claude S. (1975), Toward a Subcultural Theory of Urbanism. *American Journal of Sociology*, 80(6):1319-41(フィッシャー, C. S. 広田 康生(訳)(2012)「アーバニズムの下位文化理論に向かって」、森岡 清志(編)『都市空間と都市コミュニティ』日本評論社, 129-164).

- Fischer, Claude S. (1984), *The Urban Experience*. New York: Harcourt Brace & Company. (フィッシャー, C. S. 松本康・前田尚子(訳)(1996) 『都市的体験：都市生活の社会心理学』未来社).
- 福岡安則(1993) 『在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ—』、中央公論社.
- 福岡安則・金 明秀(1997) 『在日韓国人青年の生活と意識』、東京大学出版会.
- 国際人権 NGO ヒューマンライツ・ナウ(2014) 『在日コリアンに対するヘイト・スピーチ被害実態調査報告書』、https://hrn.or.jp/activity_statement/2105/(2022年2月8日閲覧).
- 李月順(2018) 「民族学校・民族学級における在日コリアン女性保護者の民族教育に関する意識：ループインタビュー調査を通して」、大阪経済法科大学アジア研究所『東アジア研究』68, 67-80.
- 西田芳正(2002) 「エスニシティのメカニズム」、谷富夫(編) 『民族関係における結合と分離—社会的メカニズムを解明する—』、ミネルヴァ書房 5, 512-540.
- 志水宏吉・清水睦美(2001) 『ニューカマーと教育』、明石書店.
- 志水宏吉・山本 ベバリーアン・鍛冶 致・ハヤシザキ カズヒコ(編)(2013) 『「往還する」人々の教育戦略：グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』、明石書店.
- 総務省(2006) 『地域における多文化共生推進プラン』、
https://www.soumu.go.jp/main_content/000770082.pdf(2022年2月11日閲覧).
- 徳田剛・二階堂 裕子・魁生由美子(2016) 『外国人住民の「非集住地域」の地域特性と生活課題—結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点から』、創風社出版.
- 安本博司(2014) 「在日コリアンの居場所をめぐる考察：KEYに参加する若者に着目して」、『多文化関係学』11, 23-36.